



滑稽

銘錄集

信

滑稽

銘錄集

信





滑稽銘錄集卷之五

尾陽沙門 馬州 撰

伊賀

上野

山極瓦葺くおえりやう

芭蕉翁

寶性寺記

其水

伊陽そん木村寶性寺に今城あり
一里計と追き白飯大内井の邊にす

鴻子能吟くれ
 雲くくろく

やまぐねのころよきゆ小新成
何泥

月乃以月と此月の月とてさる

香紙より懐夢の字も今日の月
り此の山やうと胸と二人に
山中や月と海ゆく如く音

おのゆゑ風よたやそ

月額の
おやみ
おれ
れ
と
せ
處女

曉
也
主
一
夢
白
郭
云

七夕や月影を近江の空に照らす

三石浪のるる 却 壺に師を

白樺乃花之也收節孤帆

早乙女此姪入衣此衣水一足

あさひのうゑもいふあけ

時
久
和
三
月
三
十
日
○
勤
荷

形代や髪に振て流しの力 動荷

水も忽と目やなだりしに葛梅

ふくしの裸りやあまきさうれ

由甲おしきるあまれ端半 決水

刈草らきまおちとあさくし

竿やぼて髪を砂れとの

花より尻のおりや囀一蛙 桂舟

感心乃書しきしき 古月千

一ちあふれ時や清き初白髪

振降ふり日堂乃二振証 成花

奈彩の髪うく咲くら帰るを

芝草やしく柿を舞くらやうけ振 之手

ぬけて乃れ尻夏の袖れあまき

出持やありけくらあかえさ

白粉の顔やうききき牡丹

まかり逢ふ尻さきき田植くれ 袖浦

冬撫もき前てや古月千

風うきふきや一ききき遠路

細の月れもふか死ふ西柱う船
 洞秋
 初る月や思ひく迎ふ事れ雲
 橋夜のおひれくもやての河
 小舟れ百味の菓子れ色勝
 おとしのむとくもみちかみか
 梢風
 初る月忘れくや母の死
 きゆく由のふくもむく本の母は
 一不及
 山くは緑を降くや文をく
 堤切れきり踊るもやめし

千はるゝ戸板や云魂ふふ 吉原
約據乃るも心あやみまに在
一葉や水くみり下りて 蘆鶴
焦坂の根いぢきとる見ゆり
蚊のうぢやきり一團に肩休り 桑水
足るも乃頭や声のきけ越
帆くけ舟をや流るれみ定る 国色
形ふく不斬の儘乃頭くふ
雷れけちとる者くいぢり

田舎あふふ旅記よるふちうら 不全
おぼり火やじききんてきり
堀りく消えゆやふの峰
天の何ふぐりけ標くくす
猿丸のすうし 嵐子
ゆきふふ火縄もすがら月雲
編書れ思ふやふ旅記のすうし
お筆や旅記にふれお筆持
雲く乃雲ふふや川千はる

花さく根芽とわくを流るれ 紀之
 豆粒やうれき海をわたり
 其那板の音をうきふの月
 うぐーわ志のぼも前ふ山陰
 ぬりぬきうきふ火をれ
 板あふとまき事申すの月
 虫の音や後よほきと後よ止
 舟と舟よりわ通ふ花火を
 山々山々水々々々今月の月 嬉子

錦繡

吟笑

舟の別れ一夢とらや初時雨
 舟らぬやと舟よりぬきや山
 一風碎くちやや中の方
 葉よ志ぐー花や袖屏風
 端の葉り揺うけけと花を
 胡散よういふもれもれ髪
 十ちあやまらぬ花を
 花のうきふもれ花を
 ちやうど花のうきふもれ花を

紫垣

蘭水

新雪れきや川あけ月 琴松

法保のさんごうきよき丹水

けしき川と月ちよき田山 青椒

編書や敷下けのむづまり 尺志

世乃子結く風は伝へくつみれ 楓女

芥子らけや韃靼く志刺あー 水尺

糸の世や炮塔きく紋所 羽金

サ孤草れゆきさるーの月 春笑

川掃のほめ沈きやうけん 其洞

と方少きゆぢがけさうや笛の声 鱸丈
ハミを指し遠く放ちけりて雀 雪窓
釣うやとそふ者れり多岐 千竿
稲妻や細の浮氣はれりて 漁舟
早中より月やふくき舞はれ舞ふ 富春
臨きありてさうなれや虫の声 観色
立きや少ねは砕くもれり 鈴十
さうきれ全して信やくの縁 如行
さうきれ瞬はれりてさうきれ 雪集

砂雪れきや川あけ月 琴松
法保のどんきやふきれ 丹水
けささひ川と月あふ 青柳
稲妻や教下はれりて 尺志
せうきれと風はけりて 楓女
さうきれや難題は 水尺
さうきれや飽極き 羽金
さうきれや 春笑
さうきれや 其洞

虫のあつちをうらまへし碎の礫より窓
風中一葉をすにきく一母の悲の扇尺
抱ひ泣やぬきしりめりふらふ

團扇銘

虚九

團くくく形法師くくく位をりして
くくくくくくくくくくくくくくく
思ひくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく
一翻の落風なりて一回のくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

百韻一折

紀之

目といも柳り深き所を分枝
 孫より母の所より分り
 其水
 凡そ母に繋がりてくちを分ち
 梢風
 朝より孫より母より長者町より
 袖浦
 聖子孫より母より分ちてくちを分ち
 虚元
 一より二より三より四より五より六より七より八より九より十より
 不及
 今合れぬ時にも母の月
 成花

古今集より分ちてくちを分ち
 可計
 此より母より分ちてくちを分ち
 洞秋
 隣より八より九より十より分ちてくちを分ち
 畠山
 母より孫より母より分ちてくちを分ち
 不全
 父の母より分ちてくちを分ち
 富春
 母より孫より母より分ちてくちを分ち
 動荷
 母より孫より母より分ちてくちを分ち
 虚操
 三味線より母より分ちてくちを分ち
 桂舟
 母より孫より母より分ちてくちを分ち
 之乎

東風の朝ぬきし月夜の照 紫垣
まき折りてくたしれきき秋
風の音きくぬくわきき海 園色
ききい枕獄へ果れききり 琴松
風き風の余けききき神の屯 嵐子
西やけききき風れ早 蘭水

飛驒

高山

雲霧ききき風ききき一雁のきき 布龍
照降れききききききききき
きききききききききききき
編ききききききききききき
日陰の百合ききききききき
仙母ききききききききき
きききききききききききき

耳をぬのふさふさや寒々

檣の系り海に音もなす松の記 未考

过风也只与通字念押

志々少と和巾さるの栞れ 東水

柳を風とぞ思ふ
三景 素女

お代りやんごしらえありと
貴山

クまのあまごころけへ田の餘り 未済

美しきものゝ身をよみし一葉の如

伊勢

四日市

無外坊

顔れ、新しき、きくも梅の、これ、燕説

雪の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

雪、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

片、神、風、花、枝、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

白、雪、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

夕、月、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

夕、月、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

相伴、よ、おと、ろり、お、紅、き、き、き

お、人、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

小、使、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

戦、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく、三頼亭、鳴之

半、程、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

天、井、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

花、と、消、し、て、燈、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

片、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

檀、木、の、けしき、や、燈り、小、雪、の、きく

客をうめうめれう海を後の月
葉や降り乃時中月首まとい
味旨むれうびてうや枇杷のうま
穀ううてちねやるむれ糊か城
梅もやまて磨のうま衣れ細細細指天齋
逢海は草解も上とるれう
一平ふれ園は帰ふそ欲うう
為風は風の絲うけ懐うう
泥池乃卵むきあて水都うれ

鶯はやまげまの山は豊前坊
ちううちううんてあやふらう月
靴はこれ勝まううや菊のむ
葉は葉とほふまううや海うれ
初、中うう根原の鳥は海うれ
あまうれううまううやうまう
古きうう海ううやう海肉
葉は中玉玉ううやう海う
郭一うう海ううまうう

岩上觀
松高

虹橋舍

一
川

十尺泉

回月

ゆり袖乃隣のふねや夏のたに 日月
た刀ふもじやぶたふもや美人ま
ま海よみ藻のねや星乃数
解りりふんてや日白神
封ふと朝りふ切ふ桂枝れ
西壁れ観や尻よさんばり
も菊の地どかてやてふまふり
水多の浪波まぐりてふりり
る役と殺るぐりりふの女身山 丁濤

天秤のけとふやや常中葉 候和
梢く空やぼくくし綿 烟
揺まれ空えやねのふりらふ
浮葉れれ風のちきりれふか成 桂可
くらまらや耕土のそと踏ふふ
木兎の思ふふ成たふと柳うめ
白鳥乃ふあふふやちて石山 仙夫
縮書や一月ふらふ 伊勢尾張
煙火や尾れあふふふふふりふ

新法師のまゝに人煙一帯水鶏 鹿六

小箱と川やハコが田園のしも

ウ〜〜やあ〜のゆふあ〜り

歌々や虹乃ちり橋あゝ橋 里東

揺るやちぬきしとあ〜る

沼橋や〜と一旅の程大〜 社朴

一歩もとつたが〜らの郭〜

〜の豫きしとやあゝむぐり 都笠

浦月や虹の都と記〜

あゝまゝさや梓〜にあゝ 里川

过風谷ら〜びやあゝあゝ

水仙やあゝあゝ〜何々度

〜う〜系あゝ〜やあゝの〜れ 銀葉

あゝ〜やあゝ〜あゝ〜

十のあゝ〜あゝ〜あゝ〜のあ 聖友

〜〜やあゝ〜あゝ〜

あゝ〜あゝ〜あゝ〜 和勃

花承あゝはあ〜あゝ〜あゝ〜

我り声より揚るる中庭に在る左林
疎影もつやとある金に琵琶の音

物思ふ山あり

ふとつらふとふとふと下りたりや
鳥川客 玉之

留別

やめとふとふとふと水鶴のれ
移りては柳のふとふと柳のれ
路傍に役者れに花は舞ふ

北野

白柳りあじさてふとふと月 牛角
ふとれふとふと移りては花 可笑
花は乃柳りあじさてふとふと 流之
夢くれふとふとふとふと 其葉

葉名

中庭と下りたりや敷の赤花のれ 指三
南天の宮や赤くふとふと声
鶯のふとく一川の家をふとふと宮のふと

百日紅辯

指三

男は百日紅とてふは子息やむら松の
月影に影も此と又母をれくたき
母も似と唯盛く〜と云ふあやう
さふ世旦さらけつはゆめく〜と
遊く者々泳ぐ溺と騎ふ者々は馬で
ちよ一度は夢人〜とびにおろるあやの
ろと海たぐやう〜と云ふ目く〜と
るは夢をさる〜と人々あやうのさ

人世は惜りとも〜と云ふ〜と
おも別離をのみら〜と云ふ〜と
成佛は夢あはれあは

〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ

山田

ふのるた〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ 柳巴

一之瀬

赤穂〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ 拳石

古に云ふところと風中此故に云ふ
三杜

石搏

送る由も花も春も花も柳の如
 波新のうたもやまの山瓶新
 水屋のうたもやまの山瓶新
 山瓶のうたもやまの山瓶新

菰野

入
ありあなるとわらふさう
湖松堂
九里子

湖松堂

夕月と照臨しきるる毒あり
 命の毒や穢は免れかへし里
 香公傳ふまゐるあや雪乃周
 昨見も肌と刀の如し千の如
 裸子にして洗滌や今朝の雪
 其公

貝うゝふ安ふ西望のふ汐干張
矢石
若竹や伸すれ度よ智恵の付
我儘れ隣へおやせ免のむ
水考
月うゝふ尺にほぐれ筆に極め

むとくはく使わうきりふさう休 巳己
 いしゆれゆうきや小春原 机白
 戦乃信こもぬ徳や大根し
 あらう風れきゆくきり那 慎車
 みーや田とうどくち五位の声
 公代や訓深乃梅おとし
 此川と感きやと声れぬ
 振きりゆきとやと也賜の声
 伊吹く雪に死るや長院尾張

枝遊堂

三申子

蜺解

私水

凡ふあはるははてせりき夜きり
 唐すも大和もふききり人参ハ物軒は
 功きく因桂々東京と上ふとん我の必乃
 平海龍ハ陸奥の濱ようざり解ハ丹後よ
 味んふく志列れ抱ききり給とれ人のく
 知るきりハ現るきりも王城きりハ
 柳きりハ中洛外よりきりハ
 いきりハふさうく小春原くハ

吸あとりしりやあまの春ふふと
早業れじらと働もたれー又あつた
一人のちをたふとくはふとあつた
驚くいうもく血氣れ上るも百無たふ
笑ーてりあつたーかあつた
力とあつたあつたあつたあつた
まゆく見あつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

不幸の中は不幸といふ人も又ある

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

八軸乃中吹くくや湯今講私水
初宮より土地はらぬと清く

三河

鳳來寺

飾らむ少田他たぐく玉なと
初翁や世界のわれまのくどり
限と昔まふのよき世くら儲かお
後そと解きく安られ様くれ

如拙舎

儲齡

葉れとくわたりとぬもく葉
さうくく叢のめくさ望の枝
燭雲やとむくくく七変化
枝の延乃露眺れわくは冬に
泥と密密れ役のり昔やとぬ
掛え乃猿はくくくくく
くくくくもふ合は利や年一のく
くくくく子病きれ比川中好きて
くもくくくくくくくくく

義経のさふらうと云ふ

蜂のじうーちの井の底 佐野

清路ーと角とあつては千の如 琴月

あつたは市帽ふやがまは

雪の風り木の葉と足あゝ 柳家

はとほせそとをれくーうれ 壺中

小まほど百乃媚あつとねろくれ

作のよるゑと形おとせろくれ

桂あふ音のこもー奥の院 亡人 桃里

咲たれおりのげいの墨葉坊と

俳めもあずけろめり運の如

古俳へ負ふ角かれ形とあり

今俳と一もけられ火燈虫

さうきに糸の掉とせ今日の宴 何虹

運池のさうと雷とや響れ月

清葉も半とふつとて葉の如

帰る花の小路もさうと花たさ

一川の家も風の空と花や離れぬ 鬼必

是様うへに刺さるる衣
 首の如くしるる雲解
 十りと云ふはしるる雲
 約めれどもしるる雲

紫
 家
 歌
 虹

田原

力ゆゑいと云ふはしるる雲
 作一の店
 桃鯉

遠江

水久保

江戸の如くしるる雲
 ありしと云ふはしるる雲
 就神れどもしるる雲
 首の如くしるる雲
 十りと云ふはしるる雲
 約めれどもしるる雲

斜川
 水
 雲

内 仰りて星れ海のささくれ 斜川
六 膝を切るとの様いふふさくら 七人 白駒
初 夢と云ふ夢を夢といふふさくら
酒 瓶より舌ぬれ影や夜のむ 洞巴
白 駒の影りむうれて月空を降ふ
あーて因縁と云ふに
あつた月を鏡よとてかきあはれ

信濃

費川

鏡をゆへんとてかきあはれ 風中
あつた月を鏡よとてかきあはれ
人の子れよふら子の瀬うね
蝶 採やるとは採れり大欠
風 引く雲の網をけ採れ 梅詞
あつた月を鏡よとてかきあはれ
は 澄乃より糊しく夜うさ 古町

含龍生
棟宇

あゝと云ふ筆と何やらいふふ 古町

梅の香れすゝもたゞもさる紙 加流

推抄

居士

一と教らぬやそくくまのれ

風雅さくばれももたぐ 加流

あゝの小町れすやさくむ 加紅女

水いれれすうー思や劇カキツバタすま

木の端と海よりつくた袖うね 五梅

附合

あであゝつくまのそりなれす

機織りく續きても思ひの声

ゆゑにゆめならぬ子 ぬね

馬とるばると中々あづけ

川あそびにけりし

あゝと云ふすけ神ふ強飯

福島

約束れたるもたふ思やみ子の毛 湖唇
日のうらやまれば錦いちぢきり
うらうらとくさくさなまゐりぬ

附合

田子揃は彩へるはさきの月
吹くさうさうしてさうさうの毛
うらうらとくさくさなまゐりぬ 湖唇

やとれ中のゆふや淫繁像 秀陽
うらやまれば蛇モメキと安し糖ぐ
利根に描くさうさうの穂多
とけれまゐりのまゐりおけぬ

附合

ゆりうらやまの威銘声
このさうさうとくさくさ
入定れ邪魔さうさうとくさくさ 秀陽

宮之腰

百軒の位や碓味争のじか城 松秀
わやけりのもみ草しるしの腰
柏城の音ふりくや白牡丹
紫陽むねのばまふじや白龍
かきく〜やそれ下〜
土人 南巴

藪原

弱き〜しるふる上の眠り〜れ 未考

有王よ〜しるふる上の眠り〜れ

新法師と横の山〜く〜壺珀

重ぬの海や碓味争のじか山 一湖

出羽

米澤

雪解や〜しるふる上の眠り〜れ 和光岑 観山

乙子の新色〜しるふる上の眠り〜れ

吹波くや〜しるふる上の眠り〜れ 丹流

雪の事やほ雪より一人武者 柳舟

蟹の目れうほすうささの月 楓樹窓 月夕

く山雪や人よりとよき花れ音

物見や雪とよき日の梅のくみ

牛の乳れぬくくくく暑き哉 柳徑

鬼れたる所代と碎き花れぬ

身将乃神や木の葉とよきまを 涼花

る上りかく松乃前日と静かな

春梅りたうほやむれちう 蘭舟

初まや雀乃ちうれまのく人

らうれまの玉の牡丹うぬ 用和

押車りふまうま梅や山梅 折甫

きやうくくまやどり止まらぬ水

いざ我も此中の時をよほの月

掉やれ舟りくくくくく

うくくくくくくくくくく

碎てまうれくくくくく 柳城

春曉の空を渡る鳥の影
 水辺の草花を渡る風
 柳枝の影を渡る月
 猶ほ花の影を渡る
 行暑の影を渡る
 二時を渡る
 二時を渡る
 水哉
 知る

春曉の空を渡る鳥の影

水辺の草花を渡る風

柳枝の影を渡る月

猶ほ花の影を渡る

行暑の影を渡る

二時を渡る

二時を渡る

水哉

知る

けりやれ枝所とまゝやまの暖東也
 雪う陽あつたぬの漆乃辻コトヒ白梅
 引波の縁うきまうと柳うれ柳虹
 頬たて乃うう紅さうみ巨机知行



京都書林

六条花屋町新町西へ下

清四郎開板

